大法輪

5

特集1 法然上人と浄土教

特集2 葬儀・法事の心得

大法輪

昭和九年九月二十八日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和四十九年 四月二十八日印刷 昭和四十九年 五月一日発行

定価 二八〇円

THE DAIHORIN
Published monthly by the DAIHORIN-KAKU
2—9, Sibuya, Sibuya-ku, Tokyo, Japan

岸澤惟安老師提唱 門脇聴心筆録

正法眼蔵全講

全二十四巻

道元禅師の正法眼蔵全九十五巻の完全提唱録
A5判／上製堅牢箱入／カラー、白黒写真入／全巻ルビ、脚注付／挿絵、原文索引付
〒10巻15巻16巻17巻200円他170円

第二十一巻

祖師西来意 優曇華 見仏 偏参 発無上心 眼晴 家常 如来全身 龍吟 春秋 三昧王三昧

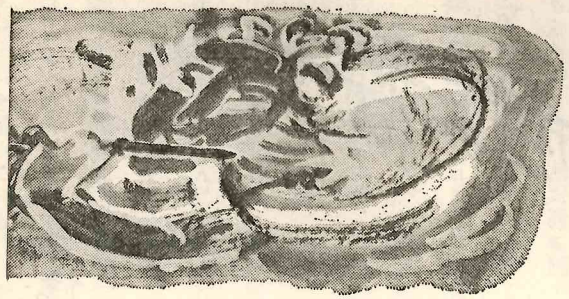
釈尊の教えを知り、学び、信じ、実践してゆくためには、まず釈尊の胸に直々に参入せねばならぬ。見性・**見仏**は実に仏教徒の出発点である。**偏参**とは正しい師を選び参じ、仏祖の活**眼晴**を獲得する姿勢。このとき日常生活の茶を喫し飯を喫する総てが大光明を放つに至る。以下八巻に於て仏の全心身（**如来全身**）・坐禅の**三昧王三昧**の深奥を諄々と説かれている。

四月一日発売

挿絵・佐藤大寛／原色口絵・瑩山紹瑾禅師画像／アート口絵・道元禅師真筆「祖師西来意」他三頁／七二八頁 定価三五〇〇円 送料一七〇円

東京・渋谷区渋谷2－9 大法輪閣 （振替・東京19番）

雑誌5909－5



評論・随筆〈五月〉
鉄笛に音韻はないが、真の音曲をきくことができる。

″エゴイズム″悪

白川義員（写真家）

一人で″三十年戦争″をやった小野田元少尉が帰国当日羽田の記者会見で、「若い一番勢いの盛んな時に全身を打ち込めることができ幸福でした」と語ったのには驚いた。そういえばあの静かな物腰や顔は、己をおさえ、滅私の精神で戦争中のいわば公の仕事を、一人でまっとうした男の自信と信念によるものであろう。

この記者会見を報じた新聞の同じ面に検察が″諸悪の根源″といわれた石油業界にメスを入れた様子も報道され、最後に石油会社の社員が「業界が横の連絡をとり合うのは、どく自然なことだ」とハキすてるように語ったとある。横の連絡をとるのは勝手だが、その連絡がヤミカルテルを作ったり独禁法違反をやるからいけないので、これではミソもクソもいっしょである。かつて商社性悪説があった。某商社の社長は「商社がかせいで何が悪い」と開き直った。かせぐのは結構な事である。しかし脱税でかせいだり、買占め、売りおしみでかせぐのはまずいといっているのだ。

私が原告で告発した写真著作権侵害事件も、私がかつて一度たりともモンタージュがいけないなどといった事はない。文学作品を映画化する場合においても、原著作者に原作料を払い、原作者の許諾を受ける事が著作権法という法律を持ち出すまでもなくそれが社会通念上の常識である。モンタージュする事がいけないのではなく、その素材である作品の原作者の許諾を受けてからやれといっているのだ。そしてそれが社会的慣行である。それをミソもクソもいっしょくたにして、表現の自由にかかわる大問題などとピンボケ議論で、新聞や雑誌が無責任に騒ぎ立てるから話がおかしくなる。

要するに商社や石油会社も含めて彼等は、相手の立場や周囲の事情などおかまいなく濡手にあわで一方的に、自己の利益だけを追求する所に問題があるのだ。現代社会を混乱させている最大の要因はこのエゴイズムにある。

しかしエゴを追求してそれで″幸福″であるのかどうか、小野田さんのジャングルの三十年と″公″という事をここらで一度じっくり考えてみたいものだ。

カット・小川千甕

穂別の村長

浅野晃（立正大学教授・文芸評論家）

さきごろ松本哲夫君が上京して訪ねてくれた。君は大木惇夫氏に師事する詩人である。大木さんは私の尊敬する先輩で、且つ有難い知己である。病床にあって『釈尊詩伝』の稿をついでいるのも、ふかい信仰から発した使命感に支えられてのことと、讃嘆せずにいられない。

私が松本君を知ったのも、大木さんの縁である。君は二十五年間、北海道の僻地の小学校で働き、こんど道の教育委員会から表彰された。たまたま道教育委員長の佐山励一君が、私の学生時代からの旧友であり親友であるので、その佐山君の手から表彰状を受けたということから、昔の思い出話に心ゆく時をすごした。

その中で、穂別村（いまは町）の村長として、生涯を村づくりに捧げて斃れた横山正明君の話が出た。松本君の最初の任地が、穂別の僻地の小学校で、村長が横山君であったので、忘れがたいものがあるわけだ。

私も当時、穂別から割合に近い勇払にいて、横山君と親交をむすぶことができた。君が最初の公選村長となったとき、君は自分の村を、日本一の立派な村にしたいという大願を立てた。

そのころアメリカのリリエンソールの『T・V・A——民主主義の前進』の邦訳が岩波から出た。横山君は一読して感奮し、穂別のT・V・Aの構想を立て、村長としての十余年をその実行に捧げたのである。

君は結核のため肺と腎臓とを一つしか持たぬ身体であったが、ふかく日蓮上人に帰依し、法華経の行者を以て任じていた。だから君は四十度の高熱を押して、なお上京して超人的な活動をすることができた。不惜身命であった。

横山君逝いて八年。君の生前その志を助けた人には佐山君のほかに、更科源蔵、田上義也、木呂子敏彦、遠藤未満の諸氏があり、み

な健在である。一夕集って故人の偉業を偲びたいと思う。

ある日の感想

瓜生（うりゅう） 卓造（たくぞう）
（作家）

この正月に、若い未知の女性から年始状がきた。彼女がなぜ若い、とわかったかといえば、賀状の裏面にデカデカと肖像写真が刷込んであったからである。しかも一人ではなく男性と二人、男性は田中総理で、親しげに挨拶を交わしている図であった。

毎年未知な人々から、幾枚かの賀状や時候の挨拶をいただく。彼らの大半は政治家か政治家志望者たちである。私は彼らの手紙にむろん返事は書かないし、それとわかればろくに目も通さずに屑籠に捨てる。彼女の賀詞も例外ではなかった。

私は後日、この未知の婦人が、テレビのタレントであり、参議院立候補が噂されていることを新聞で知った。

最近になって、彼女をかこむ「友の会」というところから便りがあった。私に会員になり、かつ知人をも会員に勧誘するようにという返信用のハガキまで添えられていた。私はあきれ返った。私はなぜ一面識もない婦人の「友の会」の会員になったり、かつ知人まで引き入れる労をとらなければならないのだろうか、差出人の頭のほどを疑うばかりであった。

アート紙の立派なパンフレットには、社会のひずみをなくそう、情操教育を高めようなどとうたわれ、田中総理の母堂とにこやかに談笑中の写真が掲げられている。さらに某保守党の機関紙の号外が封入され、一面に彼女の顔写真とともに「政界にさわやかな風を」と大書されている。

立候補者の事前運動は厳に禁止されているはずである。こういう印刷物は法律的な禁は犯していないのだろうが、実質的には事前運動と少しも変わらない。機関誌の号外には、はっきり「政界」という言葉が使われているし、パンフレットには「選挙運動は一切できませんが……」と但し書をつけて、語るに落ちている。選挙が近づくと、彼女にかぎらず、同巧異曲の来信がふえてくる。こざかしく法の網をくぐることは、ときには真正面から法を犯す以上の悪事ともなりかねない。私はこういう種類の人たちをいっさい信用しないことにしている。

くらげ

石垣（いしがき） りん
（詩人）

開店祝いや葬儀に飾られる、三本足のついた丈の高い造花の花輪。

その円形の花全体を透明な一枚のビニールですっぽり包んで届けるのは、いつごろからはじまったのだろう。

運搬途中の破損をさけるための包装なら、目的の場所についたとき、当然とりのぞかれなければならないのに。最近はビニールにくるまれたままの花輪が並べられているのを、よく見かける。なんだかしつけ糸をつけたままの晴着を着て、外に出たような姿である。

開店の景気付けなら三日、四日と飾っておきたい品だろうから、ビニールに包んで長くもたせるのもいいかもわからない。けれど日

がたつうちに薄汚れ、ところどころ破れてくると中の造花までがひどくみすぼらしくなってしまう。それが風になぶられ、ふくらんだりしぼんだりしていると、へんなクラゲがただよいはじめたなあ、と感心する。

先日通りかかった葬式の家の前では、数にして五十近い花輪が並んでいたが、半分以上は式が終るまでビニール包装のままだった。天気が悪い、物を大切にする心？

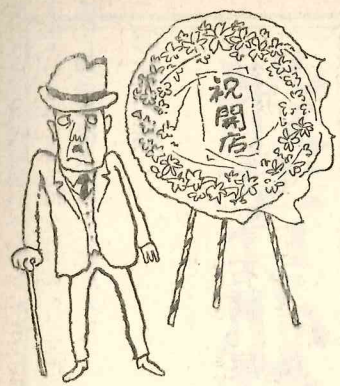
あれは、物を大切にする心？

ここのあたりでは心より物を大切にされている？

どちらなのだろう。

それともあの花輪は、このごろはやりのリースに近いもので、いためずに業者に返せば、喪中の家の収入になるしくみにでもなっているのだろうか。それなら別の話になるけれど。いや、ビニールは包装と違う。いまでは造花の一部分になった。というのであれば、商品として粗末すぎるように思う。

私は少しいたずらな顔をしてつぶやく。ケイザイ海ノ岸ニ寄セルナミ。慶弔くらげがぶかりぶかり。



文化の根

高尾（たかお） 亮一（りょういち）
（宮内庁管理部長・歌人）

スペインのレストランで、旅行中の老アメリカ夫人から、ニューヨークへ行ったらぜひフリック・コレクションをごらんなさいと教えられた。そして親切にその美術館のアドレスまで書いてくれた。このコレクションはフリック氏の遺贈で、中央公園の近くにある。列柱の廊下をめぐらした中庭のあるこのもしい建物で、展観された十六、七世紀の絵画も優品が多い。もちろん入場無料。帰りに執事風の服装をした係員から、「おたのしみ下さいましたか」とていねいに挨拶されて、こちらはまったく恐縮した。と同時にうれしかった。

ワシントンのナショナル・ギャラリーへ行ったとき、入口で守衛がつかつかとやってくる。カメラはクロークに預けろというんだろうと、カメラを持っていた同行の者にささやいていると、彼は近づいて、「ここはどこでも撮影自由です。ごゆっくり」と言う。「なにか特に見たいものありますか」と聞かれるので、「ラファエル前期と後期印象派を」と答えると、印刷した略図に赤鉛筆でその部屋を書きこんでくれる。帰りもやはりおなじところに立っていて「いかがでした」と問う。すばらしかったと礼を述べると、さらに文献を調べたいならとその係の場所まで教える。「もう閉館でしょう」と、夕暮の迫った時間を気にしてたずねると、「いや、夜もやっています。でないと、勤め人が観覧できませんからねえ」と答える。

フリック・コレクションといい、ここといい私は脱帽した。文化を愛するなどと口々に言うけれども、日本ではどうだろうか。文化

をとりまく周辺の暖かい心やりがなければ、文化そのものも育ちにくい。いや、文化の根はむしろそのほうにあると言えよう。

写経の話

石橋 犀水
（二松学舎大名誉教授・書家・文博）

私が写経に興味をもち始めたのは、もう五十年も昔、私の郷里に程近い豊前の宇佐八幡宮に詣でた折、神庫の宝物を拝観したころからである。沢山な宝物の中にとくに私の注意を引いたものが二つあった。その一は文神菅公の筆と伝えられる紺紙金泥の写経で、今一つは那須与一の書といわれている法華経の数巻である。それが果して菅公の筆であり、与一宗高の真筆であるかどうかは当時の私にはわからなかった。とにかくこうした人々の写経が伝わっているということじたいが尊く意義深いことと思った。

その後私はこの二つの写経についていろいろな想像の翼をひろげてみた。文神菅公と写経、これについては、歌舞伎の菅原伝授手習小屋や筑紫の配所太宰府・榎寺・観音寺などが連想されいかにも自然のつながりを感じた。

那須与一の写経については、誰でも思い浮ぶのは、あの屋島の沖で源平、敵味方が手に汗してその成敗をみまもる瞬間放った矢が見事、扇の的を射とめた光景であろう。これほど詩的な情景は日本歴史のどこにもない。

この光景を叙して「与一が馬を汀に進めたおり荒狂る高波で容易に的を見さだめることが出来なかったが南無八幡大菩薩と念じて放った矢が扇の要を射とめて扇は弥生の風にひらひらと海に落ち、敵味方一どに嵐のような絶讃の声が轟いた」といっている。

私は想う、その時果して客観の波が静まったのであろうか、それとも与一の胸の波が静ったのであろうか、私はこの場合、与一の胸の（主観）波が静まったと解したい。神仏への帰依―加護もさることながら彼が不断に培った修養の力が緊張の一刹那にあわてない、心の落ちつきと統一をもたらしたものではあるまいか。このように考えるとその落ちつきや統一をもたらすに最もふさわしい営みとして私は写経を考えずにはいられない。

その後、私は法隆寺で毎年（七ヶ年連続）開かれる仏典講座につらなり、いろいろの飛鳥時代の古美術にふれ、とくに古文書、古写経に一層の興味をもつようになった。この集りでも写経が一つの勤行となって、般若心経、観音経、薬師如来本願経などが次ぎ次ぎに書写された。それ等の写経は、その後、修理改築された御堂の須弥壇下に納経される例になっていた。

昨秋私は正倉院展を拝観し、西の京薬師寺に詣で改築されたご本堂の上棟と写経殿を拝観して、その壮厳と功徳に驚かされた。心に感ずるところがあって今歳の正月元旦から毎朝心経一巻の書写をつづけることにしている。これは全く無功用の写経としてつづけたいと思う。

観音様の性

田中 克己
（詩人）

「十七世紀の台湾の神仏」という小論文を書いて、台湾やその向うの中国本土では観音大士でなく、女性と考えられていることを知った。専門の高田修博士に問い参らせると、女人成仏さえも仏教には本来なかった由であるが、たまたま李容華氏の『観世音菩薩之研究』（一九七二年、香港崇文書店刊、『広東風俗綴録』所収）を手もとから取り出して読んでみると、中国では観音大士が女神となったのは宋朝からはじまり、元・明に盛んになったというのと、唐代以前から始まったというのと、唐代に景教（キリスト教ネストリウス派）の影響だという三説あるが、最後の説はもとより不可で、楞厳法華の二経に仏の変身三二相のうち、女相に変身するというのが四相あり、道教で天后聖母（福建省林氏の女という）を崇拝したのに影響を受けたというのが第一の理由、第二は法華経妙音菩薩品によって「妙」すなわち少女と考えたのであるという。

観音崇拝の中心地も浙江省の舟山群島中の普陀山がこれにあてられるようになった。普陀山はもとよりセイロン島の普陀落山から来たのであり、チベットの霊地普陀山も[redacted]同じ起原であるという。観音もさまざまあるが、広州では二月二四日が送子観音の誕日として、この日、小池にシジミとホラ貝とをいれておき、手を入れてシジミに当れば女児ができ、ホラ貝だと男で、もとより男尊女卑の国であるからホラ貝を掴んだ方が吉だとする。

観音はまた牛肉、鳩、生エビ、鱗のない魚、燕巣、馬肉、犬肉などを食うのを好まれないという。子供の欲しい女は[redacted]新年に観音の像の前に一足の小さい靴を捧げ、その年内に子供が出来なければとり返して、別のを捧げる。子供が出来たものはそのままに置いておくと、フランス人の実見談もある由、李容華氏の説をそのまま紹介しておく。随筆だから許して頂けると思う。

名品般若心経の集大成
般若心経百巻
岸田千代子著
総説＝石田茂作
A5判上製／貼函入
定価―2,000円
■好評発売中
■般若心経の写経は、天平勝宝年間に始まり、古来、貴人・高僧・武将・庶民にいたるあらゆる階層におよび、数々の遺品がつたえられている。■本書は仏教美術研究の最高権威・石田茂作博士の喜寿記念出版として、永年心経探訪をつづけてきた著者、岸田千代子女史により、百巻（収容点数一〇八巻）の秀品遺墨を、紙本墨書・瓦経・版画など六種に分類、特色・仕様・背景等を解説した紹介と鑑賞の書である。
東京美術
東京都千代田区神田司町2-7
☎292-3231 振替東京13186

嘔吐感

田谷　鋭
（歌人）

人間のからだが精密至極のものであることは薄うす感じてはいたが、このほど、些細な経験からあらためてそのことを実感した。

食事のときに、何とはなしに嘔気がするのが始まりであった。そのうち、朝の嗽いのとき、あお向いてがらがらやっていると異物が喉につかえている感じがある。痛くはないので魚の骨とも思わなかったが、いちおう調べてみることにした。軍隊で衛生兵の教育をうけているので大体のやり方は知っている。割り箸のさきに脱脂綿をくくり付けてのどの奥をさぐったが、何も着いてはこなかった。

あるとき、ふと思いついて小さな鏡で、開いた口の中をのぞいてみた。うまい具合にのどまで光が入って口蓋の奥のほうがあきらかに照らし出された。垂れさがった懸壅垂の右一センチほどの処にアワ粒くらいの突起が見える。一種の腫れものらしい。見ているうちに舌の根が盛り上るように動いた。と、その瞬間、かすかではあるが鮮明な嘔吐感がおこるのを覚えた。腫れものの性質なども気になったが、私は、いつからか体のことをつきつめて考えない習慣になっている。

のどの奥のそのあたりは一種の不可触地帯なのであろう。嘔吐の神経がきているのかも分らない。考えていてふと疑問が湧いた。それなら食物はそこに触れないのだろうか。或いは触れても平常の触れ方ならのどの関所を無事に通るというのだろうか。また、鏡を持って、今度は食物を呑みくだす恰好をしてみた。舌の根が瞬間に大きくくぼんで架空の食物を通すようであるが、分らないままに波うつ動きに変る。——人が見たらばからしいような行動をしながら私は人体の機微に見とれていた。

嬰児は舌くぼめつつ出入すいまだ意識の無かるならめど　　宮　柊二

いつか見た右の歌は、その舌の不思議、生体の不可思議をも語っているのだろうか。

老について

石井　昌光
（宮城学院女子大学長・近代詩）

わたしは朝日新聞をとっているので、日曜日の朝日歌壇をいつからか楽しみに読むようになり、果は気に入ったいくつかを別の手帖に書きとめたりするようになった。

今ふと、その百首に近くたまったメモを繰ってみて、わたしの近頃の関心が、病気と老と死に寄せられていることを知って、ある感慨を覚えた。それは、わたし自身が飛行機事故で背骨を折ったり、そのあと心臓発作を併発したりして病床に親しんだ経験と、大学院

に学んでいた二男を肉腫で先立たせた悲しみの体験を抜きにしては考えられないからである。

ところで、老についてはどうか。もちろん明治末年の生れであるから当然これもまたわが体験の中から生れる関心と言っていいが、もう少しつっこんで考えると、まだ老を現実のものとして考えるよりもやがて足早に近づきつつあるもの、として考えているようである。自分のことを、ようであると言うのはおかしいが、確実に死が将来に在るのだということを実感しはじめているという形で、老が来ているらしいと言ったらいいか。

例えば尼崎の小山ひとみという方の、〈右左わが臨終の手をとりて／夫と子の魂／哭きくれるかも〉などというような想像図に、わたしの極めて深い親近感が寄ってゆくのを覚えるのである。

一方、奈良の中村友伊子という十七歳の方の、〈逢うことが愛なるごとく／受話器より逢われぬ我れの悲しみをしかる〉だとか、白石の藤井征子という方の、〈夜学終え帰りし君の部屋の灯を待ちて寝てにし少女期を持つ〉などという短歌もメモしてあるところを見ると、これは老いまだ至りきれずなのか、それとも若い女性たちとともに過ごしている日常的惰性を若さだと錯覚していることの老なのか。

断絶と連続

木村　礎
（明治大教授・日本史）

数名の友人と雑談しているうちに、日本近代史の番付、というようなことになった。どちらを東に据えるかは別として、明治維新と第二次世界大戦の敗北、この二つが横綱の地位に座ることについては誰も異存はなかった。「どちらが大きいかなあ」と一人がいった。いずれも歴史研究者のことだから、この場合の〝大きさ〟とは、前代との断絶の度合い、逆な言い方をすれば、新しく形成された社会の、その新しさの度合いのことである。「明治維新の方が大きいかな」と言う者がいたが、誰も答えなかった。難かしくて答えられないということがあったし、肯定の意味で反論しないということもあったのだろう。いずれも五十歳前後だから、大戦中は兵隊だった。「戦争に敗けて全部変っちまったと当時は思ったが、今考えるとあまり変ってないねえ」と言う者もいた。これは、表面は変ったようでも、日本社会の底流は変っていない、ということなのだろう。

話は次々に飛んで青年のことになった。「まったく断絶を感ずるよ」が多数派で「あまり変っちゃいないよ」が少数派だった。また、「今も昔も大人と青年はお互いに断絶しているように思っているのだ。〝断絶〟はツルゲーネフの『父と子』以来のテーマじゃないか」と言う者もいた。最後の意見は私である。

意識としては「断絶」だが、大きく客観的に眺めれば、「連続」が常に基底にあり、多くの場合、結局は連続性の中に埋没して行くのではないか。ことに日本のような社会ではそうなのではないか。発展・変化・断絶等々は大声で叫ばれやすいが、それらの底にある連続については、人はあまり語らない。「そんなこと言ってちゃ歴史家失格だね」と痛烈な皮肉が私に浴びせられたが、「連続」について考えるのも歴史家の仕事だろうと思う。